



排
譜
卷
焦
決
乾

5
4412
1



5
4412
1-2

門 5
號 4412
卷 1

芭蕉談序

書肆翁全行の一冊子を懐きし時

身平言其ふりを見るときは

思ふ先き人此ぬみたる久遠子の

不脱存せしにありしを頼りこの巻しを

とて是れ芭蕉翁の若くは

従ひて居梓舎をみるるの

卯七の家を扶侍しを

昭和九年
九月五日
購求

此の以成なりは徳を清くしりて心を正す
見る事をもて世に若も柱をたむれば
かゝる徳をさうして玉を以て心徳を
よるこひを令に多し持するの事なり
誠を以て持たしこのおまじを以て
心徳を果る事也心をまよせて甚難
可よる事なり

教訓大聖精舎して業を以て書



故實 予初學の時より排謬の法を考ふる事
けふ大徳の教訓なり其外あり

まじりておよそを志ししは
三つとも備ふ事なり

一卯七云先師の徳を以て用ひ
用ひ給ひてなりしは
事もありしはと
長野の徳を以て
まじりて

連舟の形を長政の舟と云ふも——未法式也——仍て
 連舟の式をかり用ひるは連舟の法式を改作せしむ
 事もなほしよ上より定むる法式もあらずを君其人はしん
 せしと換るるも罷あらず——其時方うも遠達ハ舟を長海
 と云ふ也連舟の法式をかり用ひらるゝあり戻ておのづ
 とり此先海舟の時より舟とて連舟によらるゝは法式ハ
 別不立也——其人は法式を以て長政の奴僕なりしにおもひ
 先師の法法ハあるあり

一 亦七日蕉門のまふまゝ留の船をるる舟を三を甲申と云ふはしん
 去末之舟の形を舟上下也其を連舟を法と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん

舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん

舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん

一 亦七日蕉門のまふまゝ留の船をるる舟を三を甲申と云ふはしん
 去末之舟の形を舟上下也其を連舟を法と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん
 舟と云ふはしん——舟の形を舟と云ふはしん

悪格多しの聲のホときき乃りありり多きとり然りとりれと
いふぬるゆへありり々々四重のときき其とききとりつつさき定ん
ふれんそるり然るももいふとりとり止しゆるとり
其とききとりつつあらとりつつあらききとりつつあらきき
明るとりつつあらききとりつつあらきき

ふりあらとりつつあらききとりつつあらきき 着

何とれくはあらら風もありりれたちち 杉風

みつこきあらとりつつあらききとりつつあらきき

本早ももあらとりつつあらききとりつつあらきき

あらとりつつあらききとりつつあらきき 着

かくのあらとりつ

一卯七日あらとりつつあらききとりつつあらきき
ままあらとりつつあらききとりつつあらきき
先師曰いふときき曰いたときき一卯七日のあらとりつ
積根ありり附くいふ切きれるももふふとりつつあらきき
志しとりつつあらききとりつつあらきき
何とれくはあらら風もありりれたちち
とりつつあらききとりつつあらきき
あらとりつつあらききとりつつあらきき
あらとりつつあらききとりつつあらきき

まじく切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
ねた糸は遠く切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
ハリスの白切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
ハリスの白切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
ハリスの白切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
ハリスの白切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し
切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し

吉本曰此を志すに日口もすすくすす
人々ん思ふに志すに日口もすすくすす
魚もすすすすすすすすすすすすすす
瓜もすすすすすすすすすすすすすす
もし切らねりたればいかに白糸の如き糸も多し

一糸七色花不定色也吉本云先師曰糸すすすすすすすすすす
乃白糸短糸也十七日目本の糸すすすすすすすすすす
吉本曰引あらん二糸あり一、一、
其人糸を引るに日口の糸すすすすすすすすすす
て糸を引るに日口の糸すすすすすすすすすす

糸言

世三

切若うとハ他手ゆつろく人もある所を能くとある由
 呼出をを招くを伴も又ある時を共に二本はくの
 句ぬをを辞退するなりといふも其も引あけて
 伴も也おんもたうをを呼出さし呼出さすの遣りし
 ぬも此罪あるは又戻もねく引揚るいりんの他者
 ちうとそつろのろハ歸ん方とこの式也孝死種ちある鬼も
 角もつて一一人ぬをわゆるふありこれと云一句とあるふ
 人か句はわ一も何れ句をふらりてむとてとてとて
 一お七の曰積叢子云を極かつて極といふも吉来曰げ何
 云をさつてにかつんと先作曰返さつてふ吉来曰凡云と

極かあるとて一法一通りのさうさうかして云ひる来れ出むと
 も云やうあるやうな云やうぬもつていふもよう云あり年々
 年々をさつてとての極一とておのひゆるん先作曰これ
 ても古人の四本のうち一本を極ありぬつたはもぬたうふ
 ありは鬼も角も伴も一とていふと尋常のさつとてとて
 か一とて極かうとてとて尋常極も一とていふと尋常ふとて
 此一とていふとていふとていふとていふとていふとて
 一お七の曰甚門を一句ありも極るいふも吉来曰予けり
 此の何れか先作曰いかに此の極ありぬつたはもぬたうふ
 已上五句とあるは禮式の法也一句とて極るいふとていふと

悪句に控授ふらんいつとし一説ニ悪句は陰陽和合を句
 而此を一句あて控授ふらんいつとし亦皆大句におり
 瓦也予り又一句あても控授ふらんいつとし亦皆大句におり
 淋々志ろ何一音を意一句出れをおまれば他若悪志ろ何
 らし多しあいにしせり又五十韻百韻といふも悪句はこれ
 一音といふもせし物とすかろくろく大句は此
 多韻悪句にあれは僅二句一語は出れを幸とす
 中意句掃く又多くは悪句より句志ろ竹おま一説に
 出来りあれははなを悪句出をよからん何ハ二句の五句も
 三句一をかくらん時を強くせんとも一句あても控授ふ
 る

まじりあかきま何ともまほくの能く悪句も度々出よ
 下とおよお版や軸の上むかくつふも世道あふ似られ
 ともそしは連系たろくあはれ語の上とあはれ語を少くとも
 かもあはれ語とも古人の罪人たるをせむぬく水もたて
 後をたゆよからんを思ひゆるめ
 一や七曰蕉の予言書を月に押ひゆるやを来日世あり
 洒堂流川のさふ言書を句出たり先師曰言書を句中に月
 あれは外に月の句他さんか控授ふらんいつとし亦皆大句におり
 こそ喜ぶ月をせんらんもいつとし月をたろくの事を入るを
 といつあはれもせんらんもいつとし亦皆大句におり

曾言此句出於予曰先河既于此式をさうして上をハ
 法不習んとは其月日用ひ終らば此種六九書をア
 小先河の言ふ事を目と一終六九をそ終るうなり
 志ふを何れぬ向く目日用ひ終るはさうして
 予を考て終るうなり終六九流川九を考てハ
 不細あり終る——

一聖波曰先河力さうして金を釈義とて以嵐雪二種を終
 先師曰金は釈義といふは正月神祇ふさうして予免
 角をいふは退きおひあにけうういふは角ありん一
 小釈義と云ふも改ふ金といふは釈義ありん中えと

いふ終ふとありんはいとふ言ふ

蛙夕私曰金を梵語也よくハ孟葉多と云別于葉
 多終あり釈義を考て終る意あり終るを
 中ぬう終る

一玄来曰終ふと名月の明る事を論を予ハ予一八月十五
 終る委宿也法明を用ひ予二和考あり月言法明を
 よめたり予三終ふも終るなり予四終るなり
 字義よからよを考て終るあり予五終る不
 二終るとありん——予五終る明るなり
 明の考考てらる——かゝると云終ふ曰明るとハ八月十五

一 伴六曰古くは古書をなすは他を至く己うて其を盡ん
たとへん

名將乃掃の及んば其廟一う那

とつて其ハ名將の依うして自ら其依よありて其

一 先師曰昔上徳語の文章をんきや或ハ漢文を假名よ初るや

本々和語ハ文章ハ漢書を入き盡ハ初ありていや

云あり或ハ人性をいふとてもと其れさうさうあり

中してさうと求むる所其ありていふ

其文章の文章ハ性ハ傲意をいふとて其文章は漢書を

かゝるもさうさういふていふていふとハ歌仙のよきあり

ともあり

一 古来曰古書古書をなすは其文章一語下り上り他を

きとて其文章ハ性ハ傲意をいふとて其文章は漢書を

堀りて其文章ハ性ハ傲意をいふとて其文章は漢書を

と先師曰古くは古書をなすは他を至く己うて其を盡ん

とつて其ハ名將の依うして自ら其依よありて其

先師曰昔上徳語の文章をんきや或ハ漢文を假名よ初るや

本々和語ハ文章ハ漢書を入き盡ハ初ありていや

一 先師曰凡名師の撰らるとの書ハ其撰るその書ハ其撰る

ゆゑ撰りて其文章ハ性ハ傲意をいふとて其文章は漢書を

のうをねしはあも用ひしんは拙さるるなりし也

一 先河曰俗語書者六捨下懸中よりしを壁と云はる

濁ひたる形の風俗あるを申也—— 經冊らし書て控ん

る亦ありは名書始るなりし—— 其まふかくはるし

うは—— たるは俗名に書とて北の俗名なりし

冊のりたるを初見風俗と云らるるを劔刃なるまのり

用ひるをうらむとて先河の語なりしを改めたなりし

一 去来曰俗語書者乃ちやうハヤとり俗語集の内にて俗

語—— 俗ありしを去来の語とて先河も我を改めたなり

しこゝろは俗語—— 其まふかくはるし

入らむとて申おまふ——

一 去来曰介題の寸法ありたとて表紙の三分二をとり横

五分の一をとるとやうな様子の時先河の寸法は三分

おほえん

一 魯西曰昔抄るるに古本よりの書ありや去来曰先河

の寸法を御してんは古本よりの書ありしを先河も

つぎの寸法ありしを御してんは先河も

さう—— 出—— なるは古本よりの書ありしを

の寸法も古本の寸法ありしを先河も

書ありしを先河も

一 卯七日先師の二見歌といふを巻物よりいふ古本曰志
うる史邦を乞て写さるし時先師の言一冊寸法を垂り
寄物に志勝せりなるを巻物におきて其後門人
写しおろ人ま

一 古本曰先師曰俳諧書乃名を和歌詩久史録毎巻等と書
俳諧の名ありとあるをよむん先師の名を記すは
るね一葉三月日記をよむるは二つみのも昔は
巻の小なりて教く

一 古本曰先師の和歌に上下をうら海嶺南山と号せ先師
曰先師和歌の名ありは先師の言一冊と

魯阿ハ流化詩人なりて先師の言一冊と
書さるるは俳諧といふをよむるは



一 大州同長歌短歌なるを流き初めたるを先師の曰ある
ハ流きといふは先師の言一冊と書さるるは
を尋しとあり長歌短歌なるハ流き初めたるを
先師の言一冊と書して後師の言あり
阿の目録ハ長歌古歌に流きてその長歌あり
よむは後人難てふ決すハ流き初めたるを先師の言
ありといふは先師の言一冊と書さるるは
長歌といふは先師の言一冊と書さるるは

作裁し辨ふ三十一まお作あり是を短歌本と云ふとて
 尋常の歌にふたり然ハ長さまに作歌一首或ハ二首とて
 て長歌といふはとて下も三十一まのを短歌といふは
 目も三十一まも長歌也たといひ長歌の名目ありとも尋常に長歌と
 とて長歌といふはとて下も三十一まのを短歌といふは
 とありつゝ三代系に依りての撰集も三十一まの短
 歌と云書と同一かえりて古の歌に長歌と云ふは
 昏短歌と云ふ古詩今撰といふはとて昔之は及の先
 世といふ人を短歌の歌とて初出の長歌といふは
 人を云んや短歌といふは尋常の長歌といふは
 人を短歌といふはとて下も三十一まのを短歌といふは
 長歌を短歌と三十一まの長歌と云ふはとて尋常
 長歌といふは

- 一 正秀同士の為人をりつゝ古と三代系を祖傳といふはとて
- 志う撰集も其の撰集の長歌と三代系を祖傳といふはとて
- 下はつゝや尋常といふはとて尋常の長歌といふは
- 尋常といふはとて尋常の長歌といふはとて尋常の長歌といふは
- 尋常といふはとて尋常の長歌といふはとて尋常の長歌といふは
- 一 正秀同古今系をりつゝ古と三代系を祖傳といふはとて
- 尋常といふはとて尋常の長歌といふはとて尋常の長歌といふは

一 芭蕉一伝者かやうのうり保あうや書き世々の娘とる
 初と見えしうりかやうあうるとか人の娘か事をむすべ
 り娘と見えしうりそらにこれ初の中は松の保あうやいしを
 やまの娘物語の杜子養にまひさうさうありちりか人の
 干渉とやうの初まうあうるとそを初もすはたはと
 日まじりり

一 本節同中はか書人の後あうや書の云西村と強念のふ
 大はうらん

一 本節同中とまゝ今流布する書にあらうや書に定家
 以後のなり申おしよん自とむかえとて家々の屋敷多かうん

一 芭蕉の序に六義を説き、此後序に六義と分け、其言あ
 り、さううりや書に六義の初めをあらうや書に和義の
 るき初書一轍ある理ありをむすべし、いふて六義
 律の初あうや書をまゝは、いふて、いふて、いふて、
 あり、た先の儲けしとて、いふて、いふて、いふて、
 一にまゝ半云儲けたりとて、書き、いふて、いふて、
 ありとおめり、風雅頌、九月に、秋は、無ハ、まゝ、た
 るふ、いふて、いふて、いふて、いふて、いふて、
 見ゆ、いふて、いふて、いふて、いふて、いふて、
 書き、いふて、いふて、いふて、いふて、いふて、

芭蕉談

何れとていふ定むる後ちさるる心ありて一々和あふくむ
よる引あふくむる意難し一ツもて風雅なぬくハ云
ハは分がこあふ一

一喜堂云秀徳形よ意ハ心とて喜ふ由古ハ四喜ふよる
夢衣ハ秋しきうををあぢくは夜やうとて一はほとて
とよめを鹿と秋しをも中標り身にまひの志々を中比鳴
おとつり後やうをあぢくも出あふり

一喜堂云との人形をよふ子茶室神を徳屋あふるをよ
人あり茶室の神の二百篇あり一後やれ体裁の
詩古との神あり神形乃作又作るも一喜堂云

を用ひてと神を庵とんせは不信て凡れそのくそ茶室
神をよふるも時やれ風俗を志くそとやいそん古と茶
と神よはよれは茶室の風ありといはは神をよふとす
茶室を其持をよふてそ作裁乃あふくハ茶く習ふ
子にあふるといそんを日乱まハやのくはよ入乃後
あふんとす一一言を志くそ

一喜堂云予貫之ハ土依り記を好てよ其古雅あふる
伊勢乃右子出ハ今人そを編を人掃くと奥の細を
又依るをそよ習古依り記よお似たり茶もそを好
終よ中と茶たし笑ひあふり

芭蕉詩
上三

大子云云... 此書同様の能書といふん... 外云云... 一清然...

一清然... 一派... 一... 漸...

一... 二...

六月七日

水校

あ七振

一... 一... 一... 一...

芭蕉

一 式ハ古式ニ似

一 不系ハ古書をらんる

一 古比等如白をうらむ

を人子ソソく

一 去る等々一 座の時不

一 見てふと書ハ

信伝より困

一 化ハと交

を

一 空

